

ノイヴィルトの音楽の魅力は、まずは何よりも音色の流体的な変化にある。きわめて入念、巧緻に設計された大人の音楽。しかし同時に、フルートにタイプライターを組みあわせたり、ヴァイオリンのデュオにドラムを加えてしまったりする開放的な姿勢は、子どものように奔放だ。大人の技術と子どもの大胆さの結合。それはノイヴィルトの標榜する、男と女の垣根を越えた両性具有的な音楽のあり方とも連動しているのだろう(さらにいえば彼女の作品のタイトルによくみられる「クエーサー／パルサー」といった二つの単語の並列もこうした二面性と関わっている気がする)。

今夜演奏される5曲の室内楽作品はいずれも、ノイヴィルトのそうした魅力をこのうえなく伝えるものだ。

## 『クエーサー／パルサーII』

ヴァイオリン、チェロ、ピアノのための (2016)

2017年に初演されたこの作品は、1996年に書かれたヴァイオリンとピアノのための『クエーサー／パルサー』を、チェロを加えた編成にしたもの。

銀河系の中で、膨大なエネルギーによって輝くクエーサー、そしてパルス状の光線や電波を発するパルサーがこの曲の主題だが、まさに楽器群が作る光に満ちた磁場のなかで、小さな粒子がパルスのように飛びかう……ノイヴィルトがイメージしていたのはそんな音風景なのだろう。

ピアノには若干のプリパレーション(弦の間に異物を挟んで音を変化させる手法)が施されるのにくわえて、ヴァイオリンには通常よりも60セント、すなわち半音の3/5だけ低い調弦が求められている(のちの解説でも述べるように、ノイヴィルト作品の多くでは、こうした微細なズレが用いられて、独特の音響を形成する)。

さて、一方で「子ども」のノイヴィルトがここで用いるのが

「E-bow」である。これはもともと、磁気を用いて、近づけるだけでエレキギターを振動させるという小さなエフェクターなのだが、曲中ではピアノの中にこの機械が仕掛けられて、一種のドローンを形成する。

冒頭、E-bowによるド#の音がうっすらと響くなかで曲がはじまり、楽器を叩く音によるパルスが徐々に音程を獲得してゆく。宇宙の創世を思わせる厳かな開始部だ。やがて無窮動的に発展したパルスが、ピアノの大きな下行グリッサンドで区切られると、ハーモニクスをはじめとするヴァイオリンの特殊奏法を中心にした、かそけき響きによる中間部。ピアノが「モールス信号」のような高音をたたき出したあとは、弦楽器のノイズ的音響に、ピアノの鍵盤をプラスチックのスティックで擦る音が重なりあい、終結部へと向かう。

初演 2017年3月17日 ウィーン  
トリオ・フリュージュチュック  
委嘱・献呈 トリオ・フリュージュチュック

## 『…アド・アウラス…イン・メモリアムH』

2つのヴァイオリンとウッドドラム(任意)のための (1999)

1999年に書かれたこの曲では、2本のヴァイオリンという「大人」の楽器にたいして、ウッドドラムという「子ども」の楽器が対置されている。さらに、2本のヴァイオリンは「60セント」の差でチューニングされるために、響きは常に一種の揺らぎをはらみながら進んでゆくことになる。

楽曲構造の柱になっているのは、長い持続音と、それを断ち切るような打撃音との対比、そしてやはり固定された持続音とニュロニュロしたグリッサンドの対比といってよいだろう。曲は冒頭から、これらの対比がいくつか組みあわせられながら進んでゆくと、とりわけハーモニクスによる、モスキート音のような超高音の持続は印象的。4分音符の明瞭な音型がまるで「主題」のようにしてあらわれるのも面白い。

様々な対比が崩れ、音楽が呼吸をはじめると、ついにウッドドラムが登場する。どこか調子はずれの舞曲のような、不思議にユーモラスな響き。その後、弦楽器2本によるミニマル風の反復音型や野蛮なダンスを経て、倍音が星座のようにきらめくと、再びドラムが入ってユーモア側へ

と音楽を引き寄せる。ドラムが鳴りやんでからは一種のコーダ。さまざまな動きを回想するかのようにして素材が浮遊する。

初演 1999年11月22日 ミュンヘン  
Das Münchner Neue-Musik-Festival pro-Vocazione  
イザベル・ファウスト(ヴァイオリン)、ティ・ババヴラミ(ヴァイオリン)、  
ハベッテ・ハーグ(打楽器)  
委嘱 フォルベルク=シュナイダー財団(ミュンヘン)  
献呈 In memoriam H.

## 『インシデンド／フルイド』

ピアノとCDプレイヤーのための (2000)

ノヴィルトの作品表を眺めていると、ピアノ独奏曲が意外に少ないことに気づく。微細な音色の変化が身上だけに、ピアノを単体で用いるためにはいくつかの工夫が必要ということなのだろう。しかし、2000年に書かれたこの『インシデンド／フルイド』は、いまや多くのピアニストに愛奏される人気曲である。

曲の最大の特徴は、CDプレイヤーをピアノの内部に設置する点。スピーカーから発せられるドローン音は、あらゆる音響の隙間に浸透して、音楽に独特の潤いを与えることになる。また、ピアノの中音域にシリコン、ラバーなどによるプリパレーションが施されるとともに、全編にわたってさまざまな内部奏法が駆使される。かくして一台のピアノから、さまざまな音色が現出することになるわけだ。

曲は冒頭、暴力的なffff(この部分はかなりの程度、奏者の自由にまかされている)で幕を開ける。その後、ドローン音を密かな背景にしながらエチュード的な音型が続くが、両手の音階の微妙に「狂った」響きの設計に作曲者の鋭い耳が感じられよう。

中盤であられるのが和音・クラスターの大ぶりな連打で、この部分の色彩も実に刺激的。やがて内部奏法による倍音、プレイヤーの音響、ミュート音のパルスなどが複雑に絡みあい、ピアノの最低音と最高音の落差を存分に生かしながら、旋回音型へと到達して全曲を閉じる。

初演 2000年4月1日 ウィーン・コンツェルトハウス  
マリノ・フォルメンティ(ピアノ)  
委嘱 ウィーン・コンツェルトハウス  
献呈 ベティ・フリーマン

## 『マジック・フルイディティ』

ソロ・フルート(とタイプライター)のための (2018)

楽曲のもとになっているのは、2018年に書かれたフルート協奏曲「アエロ」。この協奏曲は、バッハのブランデンブルク協奏曲第4番の対となる曲として作られたために、フルート独奏、トランペット2本に弦楽アンサンブルという、バッハ作品を思わせる編成を持ち、さらには随所でバッハ的な音型が用いられている。同年、この曲のリダクションとして書かれたのが、『マジック・フルイディティ(ただし綴りのFluの後にハイフンが入っている)』である。

原曲では、例によってチェロがA=450Hz、他の楽器はA=443Hzという、微細にズレたチューニングが指定されているのだが、基本的には独奏である『マジック〜』でも、フルートは443Hzに合わせる事が要求されている。

ユニークなのは、フルートにくわえて、タイプライター(オリベッティの名器「レッテラ22」との指定がある)が楽器として使用されることだ。タイプライター奏者はさらに、ベルとグラス(「グラス・ハーモニカ」の要領でグラスを鳴らす)を担当しなければいけないので、なかなか忙しい。

全体は3つの部分からなる(原曲は楽章が3つに分かれているが、『マジック〜』は切れ目なし)。冒頭は、ホイッスル・トーンを交えたフルートとタイプライターがリズムカルに対話を交わすアレグロ的な音風景。途中からは重音奏法をはじめとする多彩な奏法が投入されて、徐々に音響の幅を広げてゆくが、全体にジャズ的ともいってよい軽快さが特徴だ。

グラスによる持続音が響きだすと、第2の部分。ゆったりとした時間が続く中、フルート奏者は声も用いながら、さまざまな特殊奏法をつぎつぎにこなさなければならない。

タイプライターが戻ってくると第3部。ここで突然にあられるのが『ラ・フォリア』の旋律で、ここからはまさに変奏曲のようなフォルムを取りつつ、次第に密度を高めてクライマックスへと向かう。

初演 2019年3月1日 ニューヨーク、The Kitchen  
クレア・チェイス(フルート)  
委嘱 Pnea Foundation for Density 2036: Part VI  
献呈 クレア・チェイス

## 『スパツィオ・エラストイコ』

アンサンブルのための (2005)

ノヴィルトの作品には、しばしばロックをはじめとするポピュラー音楽のようなテイストがあらわれるが、2005年に作曲された『スパツィオ・エラストイコ』もそのひとつ。ここでは各楽器が疾走と伸縮を繰り返すなかで、タイトル通り「伸縮する空間」がふわりと聴き手の前にあらわれては消える。

編成とチューニングはここでも工夫が凝らされており、まず、編成はトランペット、トロンボーン、チェロ、打楽器といったクラシック音楽における定番楽器にくわえて、エレキピアノのフェンダー・ローズ(あるいはその音色を模したシンセサイザー)とエレキギターが含まれているのが特徴。

また、チェロは60セントほど高い調弦が求められている一方で、エレキギターは、全体として(弦毎に指定がある)およそ4分音ほど低い音程にセットされる。さらに、エレキギターはE-bow(『クエーサー／パルサー』の解説を参照)にくわえて様々なエフェクターが指定されており、楽曲全体に大きなアクセントを加える役割を果たしている。

冒頭はギターの持続音。やがて細かい旋回音型が音響空間を満たしてゆくが、この中ではギターとチェロのグリッサンドが特徴的。まさにこれらによって音響空間に変形や伸縮がもたらされるわけだ。テンポが緩むと各楽器の指慣らしのようなフレーズが続き、さらには全楽器による強烈なパルスに突入。さらに終盤に入ると、各楽器のグリッサンドが堆積して歪んだ音響があらわれ、最後は断ち切られるようにして、全曲が閉じられる。

Trp (Picc-Trp) / T-Trb - Electric Pf - Vc - Electric Guit - 2 Perc ( I=Glock / Cym / Tam-Tam / Gong / Cowbell / 3 Crotales II=Vib / Tom-Tom / 2 Cowbells / Cym / Tam-Tam / 5 Crotales)

初演 2006年2月12日 シュトゥットガルト、Theaterhaus Stuttgart T3  
アンサンブル・アスコルタ

[ぬまの ゆうじ(音楽学)]